

持続可能な人びとの営みのために

～多様性を尊重する対話の場の取り組み～

福島―関東対話の会 渡辺瑛莉

1. はじめに

私は、「地球上のすべての命がバランスを取りながら心豊かに生きることのできる持続可能な社会をめざす」ことを理念としている、国際環境 NGO FoE Japan で活動して 6 年目、NGO 活動では 13 年目になります。3.11 前は、開発途上国で日本が行う大規模開発事業による環境や地域社会への負の影響をできる限り回避・最小化することを目的として活動してきました。その傍ら、足元の暮らしを見つめ直し、持続可能な暮らしを実践したいと、日本のエコ・ビレッジ周りをを行い、2011 年 4 月には飯舘村を訪れる予定でした。しかし、原発災害によりそれは適わなくなりました。自然の豊かさを大切にしながら持続可能な村づくりを行ってきた飯舘村への放射能汚染に大変なショックを受けました。

その後、FoE Japan 内で 3.11 を契機に立ち上がった部門で、初めて着手する分野でどこまでできるかの見通しも立たず手探りの中、福島の人たちと関わりを持ちながら、原発事故被害の最小化と人びとの権利の回復をめざして活動を行ってきました。現在では、①放射線被ばくと健康管理のあり方に関する市民・専門家からの提言（予防原則にたった健診・医療体制づくり）、②子ども・被災者支援法の具現化を通じた被災者の生活再建、被ばく低減、権利の回復をめざす活動、③福島ぽかぽかプロジェクト（親子の一時避難・保養）などを行っています。

このように、人びとの健康と暮らしを守るため、放射能被害への一刻も早い十分な対応を求めていく活動を行うのと同時に、人びとの関係性の分断や、長引く被災生活や状況が改善されないことなどからくる疲れ・諦め・徒労感、個々人の内部にある様々な迷い・葛藤などから、人びとが自ら持続可能性を取り戻すための対話の取り組みも行っています。本日は、後者にスポットを当てて発表させていただきます。

2. 対話の取り組み～多様性を尊重し、自らの持続可能性を取り戻す

原発災害は、私たちに「持続可能な暮らしの営みとは何か」と問いかけているように思います。この問いは福島に限らず、私たち日本に住む者、ひいては地球上に住む者に共通した問いではないでしょうか。その最前線で放射能と向き合っている福島の人たちから学ぶことが今後の私たちの暮らし方、生き方を考えるうえで不可欠だろうと考え、福島の人たちが何を感じ、何を考え、何に直面しているのかをじっくり聴きたいという思いから、福島の人たちとの対話の場へ足を運んだり、対話の場を主催することになりました。その度にしたのは、「福島の多様性」です。この多様性が引き金となって、対立や分断が引き起こされているのでしょうか？そういう面も確かにあるでしょう。しかし、私が参加した対話の場では、多様性を等しく歓迎するファシリテーターのサポートのもと、異なる立場の人どうしが本音で話し合い、対話を深めることで相手の立ち位置への理解が促され、互いを尊重し、自分の中の多様性をも尊重することによって、それぞれの歩みが進みだしたのです。対話の可能性を実感しました。

福島に足を運ぶだけでなく、身近にいる福島の人たち、つまり「自主的」避難者の人たちとの対話の場を持つとしたのが、福島―関東対話の会です。対話の会では、11 人のメンバーで約 3 か月の準備期間を経て、2012 年 6 月からほぼ毎月 1 回都内で開催し、今月で 8 回目を迎えます。当初は、母子避難の方々の参加を想定していましたが、蓋を開けてみると、自主避難された男性の方、福島在住で活動さ

れている方、支援されている方といった多様な方々が参加してくださっています。

対話の会がめざすのは、「多様性の尊重」です。一人の中にも多様な声があり、それらが葛藤してたりもします。そのような個人の内部にある多様な声も、異なる立ち位置の人たちの中にある多様な声も同時に大事にします。対話を通じて、葛藤や対立を引き起こしている一つ一つの声を紐解いていき、その声にじっくりと耳を傾けてみることで、個々人の気づきが促されます。誰かの話を聴くことにより、自分を客観的に見ることになったり、聴いてくれる人がいることで抑え込んでいた言葉が紡ぎだされたり、あるいは、自分の立ち位置を明確に表現し、双方の立ち位置の間で対話を促進することにより、相互理解が深まったりもします。そのように気づきが促されると、その人のもつ多様性、全体性の回復につながり、失いかけたパワーが蘇ります。以下は、参加者の方々から頂いた感想の抜粋です。

- ・（前略）「心の声」を拾いあげる対話の会。抑え込んで来た葛藤が言葉となり、引き出される様々な感情に全員で向き合う対話の場です。（中略）福島に最も必要な「前進するためのコミュニティ」だと思います。
- ・（前略）この会には、話しても大丈夫という安心できる場の空気がありました。とても温かく包んでくれる空気です。皆さんが関心をもち、自分のことのように聞いてくれる。（中略）まだ人にエールを贈れる余力が自分に残っていることも再確認できました。
- ・（前略）参加してお一人お一人のお話を聞かせて頂いて感じた事は、県外に避難されている方々のほうが、情報もあまりなく、苦悩、葛藤していることに気づかされました。（中略）この会を通じて多くのものを学び、気づかされました。自分の闇の部分を見ていた事、（中略）避けていた事に向き合え整理できた事。自分で自分に壁を作って諦めていた事。など多くのものを気づき、それらを乗り越えられたこの場に感謝すると共に、このような安心で安全な場だからこそ、心の扉が解放され、真の自分でいられる。そんな場が有難いと思います。
- ・（前略）もっとも感じたことが参加した方々の表情が前回お会いした時と明らかに顔が変わっていたこと。それはみんな、凛としていて輝いて見えた。それらは、すべてを物語っていると思う。原発事故でそれぞれ葛藤・悲しみ・様々な事が起こったけれど、それを懸命に乗り越え、そして立ち上がった時の逞しさでもあると思います。（中略）それぞれが自分の人生を輝かせるべく旅立つ上で、この場が station であるのだから。（中略）「今」を自分の今年をこれからもしっかり生きたいと思う会になりました。

このように、対話を通じて、参加者が①自らの中にある多様な声に気づき、全体性とパワーを取り戻す、②異なる立ち位置の人への理解を深める、③互いに信頼を構築することをめざしています。

3. まとめにかえて～支援の課題

最後に、対話の活動から見てきた支援の課題について触れたいと思います。私たちがめざすのは、「支援者－被支援者」の役割が固定せず、「支援者」も「被支援者」から学んでいくことです。「被支援者」の間にも実に多様性があり、「被支援者」を置き去りにしてしまう支援ではなく、その多様性に耳を傾けていくことが大切だと考えています。

また、多様な声に耳を傾ける場をつくることは同時に、「支援者」も含めて私たち一人一人が自らの生き方を振り返る場でもあります。多様性を尊重することは、持続可能な営みへとつながり、様々な課題の解決を図っていくうえでの足場となると感じています。

福島－関東対話の会ホームページ <http://fukushima-kantou.jimdo.com/>